

主のご降誕をお祝いいたします。

豪雪、酷暑、台風や集中豪雨、地震など数々の自然災害、激動の国際情勢に有名人の相次ぐ訃報など、目まぐるしい一年だった2018年。カトリック教会では潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録や新枢機卿親任、新司教叙階式など、待望と成就の一年でした。クリスマスを迎えて、飼葉桶に眠るイエス様のもとに馳せ参じた羊飼いたちのように、今は心静かに救い主の訪れに感謝し、お祈りしたいと思います。



「AMOR – 陽だまりの丘」3年目に突入


<http://webmagazin-amor.jp/>

「あっ、ここにキリスト教を語る新しい場所がある！」——そう思ってもらえたら最高です。ウェブマガジン「AMOR-陽だまりの丘」がスタートして10月には満2年を迎えました。「よく続いたな」「いやあ、まだまだだなあ」……相反する思いの中にある編集チームから、おもな側面を紹介させていただきます。

SIGNIS JAPANの会員有志から生まれた一つの活動SNN(SIGNIS GOOD NEWS NETWORK)、そのまた有志のプロジェクトとして始まったのがAMORです。お金を払って入手する紙の雑誌と違って、だれもが自由に閲覧できるウェブサイトの一つです。内容的にはやはり、特集や種々の連載、エッセイなどで構成し、各記事を定期的に更新していく（実際には、積み重ねていく）点で、雑誌的なサイトといえます。創刊から半年後に『カトリック新聞』（2017年5月28日付＝写真）でも紹介されたのが認知される一つのきっかけとなり、その後、爆発的とはまでは行きませんが、着実に読者の輪は広がっています。



現在、おもな連載は「映画で発見」「ミサはなかなか面白い」「アート&バイブル」「音楽の神髄」「聖書を100倍楽しむ」など。わかりやすく新鮮な文面を通して、確かな知識や深く考えさせる内容を届けたい、という趣旨で、見せ方・伝え方に工夫を重ねています。特筆すべきはチームの中の若い世代が開発したゲーム版「嘉島理華のドキドキ聖人伝」（タイトル画像参照）。キリスト教的な内容に新感覚でアプローチする意欲作です。

特集は26まで重ねました。雑誌らしく「毎月の特集」として企画し、テーマとしては、一方で、クリスマスやイースターなど教会生活での季節感を考慮すること、他方では、広い意味でキリスト教と日本の文化や歴史・精神性が交わる次元に光を当てていくことを目指しています。島原の乱、浦上四番崩れ、戦争・平和・人間、沖縄とキリスト教……など、いずれも、大きなテーマへの取り組みの糸口で、これからの展開への抱負を込めています。また全体を通

嘉島理華の
ドキドキ★
聖人伝



して、SIGNIS JAPANの関連活動として、メディアの使命に対するまなざしは欠かさず持っていたと考えています。そんな連載や特集や各エッセイに対して、最近SNS展開への素早い反応が目立ってきていて、励みとなっています。まだまだ教会的範囲にとどまっている面が強いですが、3年目に突入した今、限りなく広くいろいろな人々にご覧頂けるよう、テーマにも見せ方・伝え方にも思い切った試みをし、命名本来の趣旨にある、多くの人の「光と温もりに満ちた、愛ある広場」となれるよう進めていきたいと思っています。どうぞ、ご期待ください。（石井祥裕 AMOR 編集長）

EWTN 取材同行記 プロのTV番組制作に同行して

今年の3月14日世界的なカトリックテレビ局のEWTN(米国)の番組ディレクターから小生宛にeメールが来た。8月中旬に日本で聖フランシスコ・ザビエルと、もう一人の聖人のTV番組の撮影をしたいので協力して欲しいとの要請だった。訪問希望先が11箇所。先方が企画・詳細計画を立て、アポも入手するのなら、小生は東京地区のみお手伝いと軽く考えていた。異国でのTV番組撮影、どうするのだろうとの興味もあった。これが大間違い。最初は2チーム4-5人と言われたが、最終的には聖フランシスコ・ザビエルの1番組だけとなり、1チーム2人、しかもローマからイタリア人夫婦2人(Cristiana Video社)が来日、8/20夕成田着、9/1昼鹿児島発の実質12日間の撮影日程となった。

日本のインタビュー希望先にレターを出しても返事がない、とのことでまずは先方の訪問希望先をカバーする大日程表を作成、趣意書を翻訳して大司教様お二人の予定を確保、次は訪問先・撮影場所の撮影許可申請(これが大変)・インタビュー申請、インタビュー予定者とのコンタクト・日程調整、現地での案内人の確保(これもギリギリまで決まらず)、国内移動の電車の時刻・料金調べ、新幹線切符立替購入、等々。結局日本側受入窓口として窓口業務の他、東京・鎌倉・京都・比叡山・堺・長崎・外海・平戸・生月・鹿児島と、ザビエル関係地の他、殉教地も巡る全行程に同行することになってしまった。

イタリア人夫婦との初対面は新宿の歌舞伎町のホテル、その軽装にびっくり。撮影機材だけでも大荷物と思っていたが、撮影機材は旦那のリュック1個(ビデオ用でなく、写真用のカメラ1台2役、交換レンズ、三脚、携帯用薄型照明&三脚2組、ピンマイク音声送受信機)と小型の手持ちバッグ、着替え等は奥さんの小型のスーツケース1個+身の回り用の小型リュック1個。

今回は日本人の宗教観も覗いて貰おうと明治神宮、浅草寺、鎌倉大仏、長谷寺(水子供養地藏の列)、比叡山延暦寺も訪問、堺ではイエズス会宣教師が日本人への布教の為に茶の湯を利用したことなどを学び、仁徳天皇陵も見た。



東京大司教区カテドラル聖マリア大聖堂にてインタビュー後、菊地大司教様と

旦那がビデオ撮影、奥さんが企画・インタビューとやはりそこは餅屋は餅屋で、その真剣で熱の籠ったプロの仕事ぶりには大いに感心した。



長崎大司教館1Fロビーにて高見大司教様へのインタビュー風景

小生の一番印象に残ったのは長崎

の元潜伏キリシタンの子孫の方々のお話。浦上四番崩れから戻った先祖は茶碗のかけらで土を耕したが、誰にも咎められず信仰できる喜びに浸ったという。原爆で兄弟4人を失った。また別の方は家族全員がカトリック。キリストの教えを当たり前として受け入れた。今信者が少なくなって、子供への継承に不安を感じる由。

生月や平戸の資料館では〇〇家の祭壇との説明で納戸神ほかいくつもの祭壇が仲良く並んでいる。朝日集落ではかくれキリシタンから世話になったお寺に宗旨替えした方の子孫の方のお話も伺えた。

今回は大変ではあったが、多くの方のご協力が得られ、イタリア人夫婦も大満足でしたし、小生も行ったことのない場所にも行けて、貴重な話を一杯聞けて、大いに勉強ができた。思い出深い楽しい3人旅となった。



鹿児島カテドラル ザビエル記念聖堂にて、右から Daniela Gurrieri 氏、Fabio Carini 氏、町田

チャオ!

なお、今回の撮影がTV番組となるのは来年秋から再来年との事、DVDを送って貰えるので、今から楽しみにしている。

(町田雅昭)

★EWTN はマザー・アンジェリカによって1980年に設立され、1981年より放送開始した全世界的なカトリックTV放送局。現在はEWTN Global Catholic Networkと呼んで、全世界145ヶ国に11のネットワーク(ケーブルテレビ、衛星放送)から英語・西語、独語で週7日、24時間で番組を配信・web配信もしている(2.6億世帯)
www.ewtn.com
<https://www.youtube.com/user/EWTN/videos>

映画で振り返る 2018 年

カレンダーも残りわずかになり、今年、感動した数々の映画が生まれた。その中で私が選んだ数本を分かち合えたらと思う。

まずは、森下典子原作の『日日は好日』は、茶道を通して人生を豊かな日々を過ごすことを教えてくれる映画だった。大学生の主人公典子は、母親に勧められて茶道を始める。彼女は、茶道と学校や会社での価値観との差に戸惑いながら、お茶を続けるうちに、自然の草花や、四季折々の豊かさを、心で感じることの素晴らしさに気がついていく。忙しく時間に流され、マニュアル通りに生きる、現代社会の人々が「フツ」と息抜きができる映画である。

『ブリジット・ジョーンズの日記』のプロデューサー、ジョナサン・カヴェンディッシュが自分の父親の半生を描いた『ブレス しあわせの呼吸』は、ポリオウィルスに感染して余命数ヶ月と診断された主人公ロビンが、妻や友達の助けによって、36 年間も生き続けた姿を描く。自分に起こった障がいやネガティブに考えるのではなくポジティブに考え、様々な可能性を見出していくという希望を与えてくれる映画である。

伝説のバンド「クイーン」が「ライブ・エイド」に至るまでの道のりを描いた映画『ボヘミアン ラプソディ』は、メインボーカルフレディ・マーキュリーがまだ無名バンドに

入り、世界的ロックバンドにまで導いていく様を描いている。革新的な音楽を生み出し、イギリスだけでなく、アメリカ、日本へとその名を広めたフレディは、その一方、彼自身がバイセクシャルと気づき婚約者と別れ、メンバーとも別れるという孤独を味わって初めて、本物の家族の愛を知りメンバーと和解した。映画はその伝説的な「ライブ・エイド」を感動的に伝えている。



最後に、ネロ皇帝時代のローマの大火の罪で捕らえられたパウロと、彼を訪ね手紙を書き上げたルカの姿を描いた『パウロ～愛と赦しの物語～』は、『使徒言行録』そして『テモテへの第二の手紙』の完成までを私たちに教えてくれる。キリスト信者への迫害が激しくなる中、ローマに残った信者にパウロは、ルカを通して「非暴力で戦う」ことを伝えるのだが、血気盛んな若者たちは剣を取ってしまう。一方、病気が悪化し瀕死の状態になる娘を持つローマの長官は、最後の望みをルカに託す。自分たちを迫害したローマ人の娘を癒すというのは、敵をも愛するというイエスの教えを实践した姿を教えてくれる。今年も良い映画との出会いに感謝し、来年も良い映画と巡り会えることを楽しみにしたい。(Br.井手口 満)

私のクリスマス

私のクリスマスは、パウロに倣って、<神の思いに捕らえられること>を思い出す日にしています。神さまは、正式なクリスマスと同じ様に、私が喜ぶであろうと思い、お願いしなくても私にも来て下さいました。しかも、生き方について悩む私の心の中に入って下さいました。こんなに素晴らしい生き方を私のために勧めて下さるためには、神さまは自分を長い間見守り(もちろん、私は無意識でした)、その時に憐れみをお持ちになったのでしょう。特に私が全く驚き、感激したことは、真の人間としてひそかに願っていたことを見抜かれたということです。私も神の思いに完全に捕らえられました。私は直ぐに洗礼を受けて、キリスト信者になったのです。特にクリスマスの日にはこれを思い出すようにしています。神がこんなにも忍耐強く、優しい方であるということを知り、そして、私は神の存在なくては、生きられないことがはっきりしました。現実においても、怖がらずに安心して何でも受け入れることができるようになったのです。

その上に、その後の私の信仰生活のためにも三つのイエスの言葉を教えて下さいました。一つ目の言葉と二つ目によって、私はいつも目を覚ますようしており、聖霊の働きを頼みとしています(ルカ 12 : 36 と 12)。

は私を苦闘させています。イエスは「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」と言います(マタイ 18:3)。ところが、現実には私は 3 人



の子供たちの父親で、また、4 人の孫の爺です。これを実現することは容易ではありませんが、私も神の国の宴会の席に確実に着きたいので聖霊の助けによって、心の中でも必ず実現したいと思っています。

私だけがキリスト者になれて、こんな素晴らしい人生を送ることが出来るのはもったいないのでその他の兄弟姉妹と一緒にこの道を是非歩きたいものです。

最後に、神さまはルカ 11 章の<真の幸い>によって、私の現在の生活についても心配して下さいました。私は毎朝、神の言葉を聞いています。

将来、神に会う時には次の様なお礼を言いたいと思っています、「本当に有難うございました。何もしいのに神に出会える以上の感謝はありませんでした」と。

(大田民雄 賛助会員)

シグニスアジア会議報告

シグニスアジア会議が、2018年8月13日～17日、タイ・バンコクにて開催されました。今年のテーマは、「Fake News versus Media for Peace (フェイクニュース VS 平和のためのメディア)」。このテーマは、教皇フランシスコの「世界広報の日」メッセージから霊的な刺激を受けたものです。

日本からは、土屋至会長、町田雅昭事務局長、オブザーバーとして岸本景子氏(映画監督)が参加しました。



今回は参加13カ国、約50人の参加で、2/3が司祭・シスターで1/3が信徒。今回も司祭の教区ソーシャルコミュニケーションセンター(以下SCCと省略)や修道会のSCC関係者、TV、ラジオ、宣教誌等の関係者が多かった。熱気のある講演・研究発表に圧倒された。今回も多く刺激を貰い、多くの収穫を得た。当初はフェイクニュースを取り上げてどんな議論ができるのだろう、教会はフェイクニュースとは無縁か、あっても直接対決はまずないのでと、会議の中身を心配していたが、今回参加して教会とフェイクニュースは創世記の時代から関係があり、その後もフェイクニュースによって家庭や社会や国家が分断され、平和が脅かされ、世界戦争にまで至った過去と具体的に日々フェイクニュースと戦っている人々の話を聞き、我々も気を付けないと知らず知ら

ずに影響を受けている、しっかりと意識して防御し、真理、調和、平和を守る努力をしなければとの思いを強くした。



オブザーバー参加の岸本景子監督は、愛嬌と親しみ易さで皆に受け込み(特にタイのシスター方とはお友達に)、会議を楽しんでいました。夕食後には岸本監督映画作品『ある夏の送り火』(英語字幕版)の上映も出来、初の海外上映と大変喜んでいました。

(報告 町田事務局長)

岸本景子監督の感想

《SIGNIS ASIA Assembly 2018》に参加し、映画制作に携わる立場として私は、これまで以上に、映画の物語、登場人物の設定に嘘や偏見がないか、ただ作るだけではなく、受け取り手の存在がいるということを忘れないようにしなければならぬと思いました。映画の分野においても、新設されたデジタルメディアの分野と同じく、映画制作に必要なカメラやパソコンなどのデジタル機器が安価になったことで普及したこともあり、今日ではショートフィルムをはじめ、映画を制作する人が増えています。それゆえに、世界中で映画祭の数も近年増加しています。それは商業映画のみならず、インディーズ映画のレベルまでに及びます。それだけ映画は国境を越えやすい分野だからです。だからこそ、自国だけでなく他国の人にも間違った情報を伝達しないように気をつけなければならぬと思いました。またそれとは逆に、自国のことも正しく伝達ができる分野でもあります。その強みも、もっと活かしたほうが良いと再認識をしました。たとえば、日本ではこんな問題があり、またこんな伝統行事や風習があるといったことです。情報伝達のためのメディアという特性を知り、それを活かしていくことも必要なことだと改めて思いました。



※写真 下段右から2人目が岸本監督、上段右、町田、続いて土屋

賛助会員募集

一緒にメディアを通して福音を伝えていきましょう！

わたしたちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」(年3回発行)をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。

年会費 3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。

どうぞよろしくお願いいたします！

〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42 聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN /

info@signis-japan.org

会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。

郵便振替 口座番号 00100-0-594547 口座名称 SIGNIS JAPAN 代表者 土屋 至